

チベットの発展における非物質文化遺産の保護について —伝統的な生産用具を中心に—

李 利* 梁 景之**

生産用具あるいは労働に必要な道具は生産力の三つの要素のひとつであり、社会発展の要因でもある。生産用具の段階的な質的、飛躍的变化により、歴史上の変革と社会発展は極めて大きく推進された。そのため、生産用具は生産力レベルの重要な指標であるだけでなく、一定の時代における文明と文化の重要な指標でもあり、時代性、地域性、民族性を鮮明に保持して時代の変遷と社会の進歩を示すものである。

チベット地区は中国の重要な高原農牧業地域である。チベット族の人々はチベットのさまざまな地域でそれぞれ特徴のある生産用具を長期にわたり作りだしてきた。それによって中国の生産用具の発展史は豊かになったのだが、生産用具を一種の知識や情報を伝えるものとみなすならば、チベットの生産用具はチベット族独自の民族文化と民族精神を伝承しているものとも考えられる。伝統的な生産用具の保護を重視することは、民族の文化と民族の精神を維持することである。時代の移り変わりのなかの社会の進歩、機械化のレベルの高まり、工業化の進展によって、伝統的な生産用具は次第に人々の生産・生活の領域からしめだされ、一種の文化財あるいは文化遺産として存在するようになっていく。

特に改革開放以降、中国各地には激しい変化がもたらされた。チベットの伝統的な生産・生活様式にも影響が及んだ。2010年1月、中国中央のチベットに関する第5回目の座談会においては、チベットの飛躍的發展を更に進めるための重大な現実的戦略が強調されている。現在、及びこれから後の時代においても社会事業の発展を主目的としながら、チベットの物質、非物質文化遺産の保護を強化し、民族の手工業を支援することが示された。文化は民族の血脈であるからこそ、伝統的な生産用具が完全に歴史の舞台から姿を消すまえに、全面的な調査、収集、整理、保護を行い研究することは、歴史的意義と現実的意義を持つ、非常に緊迫した課題なのである。

チベットの伝統的な生産用具は伝承性をもっており、一定の期間の歴史と文化的素因を有するものである。本文に取り上げる伝統的な用具はこの範疇に属するものだが、具体的な期間については、主にチベット平和解放の前後から今日まで使われている生産用具とする。これらの生産用具の種類は多様で、数量も多く、主に手作りであるという特徴を有す。材料は木、竹、石、金属などである。その機能あるいは使用範囲については、農業の用具と手工業あるいは家内手工業の

* 神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程

** 中国社会科学院民族与人類研究所研究員

用具などの2種類にわかれる。50～60年代の調査によると、役畜と主要な生産用具の使われる状況は次のようであった。

(1) 役畜は主にコウギユウ、犏牛、ヤク、ロバ、馬、乳牛である。コウギユウと犏牛は主に田畑の耕作と播種の際に用いられる。ロバは主に食糧、肥料などの運搬に用いられ、馬は乗用のみ、ヤクと乳牛は田畑を耕すことには用いられず、主に秋の収穫の際の「踏場」に用いる。

(2) 主要な農具は鋤、鋤、シャベル、鎌である。鋤は春の耕作と主に播種のための農具であり、鋤の柄は木製であり、刃は鉄製である。鋤は柄が木製であり、頭の部分は鉄製である。シャベルは柄が木製であり、シャベルの頭の部分は鉄製である。鎌は柄が木製であり、刃は鉄製である。他にも収納具、運搬具などの生産用具がある。用具はほとんどが鉄と木を組み合わせたもので、鉄の部分(刃など)は現地の鍛冶職人によって作られたものである。豊かな農家は毎年鍛冶職人を雇って農具の修理や新しい農具作りを行い、使用する鉄は自分で用意していたとされる。鍛冶職人自身も少量の農具を作り販売していた。村の大工も木製の農具を作ったり、修理したりすることがあったとされる。

なお、主な農具以外に組み立て式の生産用具も多くみられる。例えば牛軛(牛2頭の頸部に横木を置いて、犁と接続して使われる)、木耙(春の種まき後から用いられる。柄は木製であり、歯は木製あるいは鉄製であることが多い)、シャベル、堀坯鋤、鎌、連枷(lian jia 脱穀用農具)、四股又(先が四つに分かれている農具)、角又、多歯耙(多くの歯を有する熊手)、篩(木製の曲げ物の枠の底に、革製の糸を編んで作った篩であるが、竹、鉄を編んで作った篩もある)、円扁(羊皮製のひも、ホウキ草を円形に編んだもの)、播種カゴ(ホウキ草を編んだ播種用のカゴ)、ホウキ、背カゴ(肥料、家畜、土などを背負うための草を編んだもの)、竹扁(四角形で竹を編んだもの。大と小の2種類があり、大きいサイズは酒を作る際に米、麴を陰干しにすることに用い、小さいサイズのは羊毛やダイコンなどさまざまなものを置くのに用いる)、草カゴ(竹を編んだもの)などである。

(3) 紡織用具には、木製の織機、紡績の車、紡績の金槌がある。食糧の加工用具は水磨(水車で回す臼)と石磨臼である。その他、日常生活に使用されるものとしては、ハダカムギを炒めるための容器、バターを作るための容器などがある。

一般的に各家が持つ農具の数量は、その家の農業の規模と関係がある。即ち耕地の多くある家は所有している農具の種類が揃っている。反対に、耕地の少ない家は所有している農具も少ないようだ。例えば、差巴という地域では各家が一定量の耕地を所有していたので農具の揃っている家が多い。しかし、堆(qun)という地域は耕作する土地が少ないため、ある家には犁、軛と熊手しかなく、またある家には何本かの鎌あるいは鋤、シャベルしかない場合がある¹。

チベットの農・畜産業は長い歴史を持っており、長期にわたって生産活動の豊富な経験が蓄積され、実情に見合った生産用具が作られてきた。しかし封建的な農奴制が長期にわたって存続してきたので、生産力のレベルは非常に低くなり、生産活動の発展も非常に緩慢になっていた。チベットが民主的改革に至る前までは、人々は広大な地区で蔵犁を用いて耕地を耕し、手で種を播

き、ヤクを使って踏ませていた。用具はほとんど木製であった。つまり、チベットの生産活動は数百年前とほとんど変わらない状態のままとどまっていたといえる。農作物の生産量は蒔いた種の数量の4〜7倍を上回らなかった。焼畑農業が行われている地方もあった。牧畜業の生産はきわめて遅れ、原始的な放牧方式のままであった。チベットの生業は主に農業と牧畜業とに分かれており、手工業と商業の占める割合はとても小さかった。さらに、チベットの手工業はほとんどが家内副業であり、生産用具と生産技術も非常に遅れていた。

1951年の平和解放後、中央はチベットの農・畜産業の発展を非常に重要視して、農業生産の発展に従って、新型の農具の導入を始めた。50年代の新型の「歩犁」導入をはじめとして、次第に伝統的なチベット式の犁を用いた耕作方法は打ち破られることになる。50年代、政府は無償で新型の農具、鉄製用具を各家に提供した。例えば、歩犁、熊手、鋤、鎌、斧、羊毛用鋏などである。新型の農具の導入と供給による生産の発展に従って、チベットの農業用機械は点から面へ、小から大へ、低いレベルから高いレベルへと次第に普及してきた。機械化された農場が、ラサ、シガツェ、チャムドなどに建てられ、トラクターも高原に入り始めた。

水車、畜力の播種機、ウインドロウ、畜力で脱穀する石製ローラーなどの農業機械が次第に普及し、改良された鉄製チベット式犁の歯、釘歯耙（釘のような歯がある熊手）、木耙（木製の熊手）、鉄楸（鉄製シャベル）、石礮（穀類を砕く石製の用具）、風車、水力脱穀機、水車、糞（家畜にひかせて、溝をつけながら種をまく用具）、手押し車、新型歩行犁（改良された畜力犁）、梳毛機、ふるいなど新型の農具が次第に普及していった。特に「新型歩行犁」とトラクターの導入は伝統的な生産様式を変え、生産力の発展に重要な役割を担ったのである。

1959年の民主改革の後、チベットの農・畜産業にはさらに新しい活力が注ぎ込まれ、農業の機械化は一層発展させられることになった。

60年代において、半機械化された農具は更に広まり、農具の数量もさらに多くなり、種類も一層多様化した。一部の地域では「耕地鉄犁化（耕地を耕すときに鉄製の犁を用いる）、鎌化（鎌で刈り取る）、打場gun化（脱穀の石製ローラー化）が行われた。木製の犁で田畑を耕し、「カゴを背負って、背中を切るように押さえる」、「手を用いて抜いて、刈り取って収穫」、「ヤクが農地を踏む」といった原始的な生産様式がめざましく改善されたのである。

70年代、チベットでは動力による脱穀機、選別機、畜力七行播種機、四行播種機、畜力の刈取機などが試験的に相次いで導入され、機械化、半機械化された農具の普及は更に進められていった。それに従って生産力のレベルは大幅に向上していった。特に1975年の人民公社化以後、人民公社に属する生産組合により農具の機械化の進展は早まり、機械化された農具の保有量も大きく増加していった。それに応じて機械化された農具のレベルも高まり、農具の機械化の占める割合はますます大きくなってきた。

80年代以後に進められた農村改革と、すでに整っていた生産責任制に従って、従来の農業の経営方法も農具の所有制度も変化した。国家、集団所有制から共同経営あるいは個人（農牧民）経営へと移行することになり、90%以上の中小型の農具が農民に譲られることになった。山南

を除いて、ラサ、シガツェなどの主要な食糧生産地帯における農村地域では、生産用具としての近代的な農業用機械はますます頻繁に使用されている。

伝統的な“二牛擡槓”が農業機械に取って代わられたことは、チベットの伝統的な農業が近代的農業に転換することになった重要な象徴である。農業機械に関する経営形式が変わったことは3つの変化をもたらした。1つは農牧民の農業機械の購入に対する情熱に刺激を与えたことである。もう1つは農業機械の利用率を高めると同時に、伝統的な農具を引き続き使う余地を残したので、伝統的な農具の合理的な使用法をもたらしたことである。3つ目は内陸で生産された小型農具が更に市場に出回ることによって、それらは価格的にも安価であったため、完全に地元の手工業で生産される農具に取って代わるようになったことである。

21世紀に入ってから、中国政府は次々と農村に対する政策を発表した。農業機械を購入するための補助金の政策は、「支農」、「恵農」、「強農」という重要な政策に入れられる。2005年から、チベットは農業機械を購入するための補助金の援助という政策を享受し始める。このように、ここ数年来の政府の一連の補助政策に従って、チベットの農業機械化は急速に発展する傾向がみられる。

おおよその統計によると、2009年、チベットでは機械化された生産用具を用いて耕起、播種、収穫の作業を行う面積は、それぞれ200万ムー、197万ムー、168万ムーに達し、2008年に比べてそれぞれ2万ムー、3万ムー、3万ムーほど増加した。2012年、チベットにおける各県の運行の規範に合う農業機械化協力機構は36軒に達し、実現した機械化耕地は13.8万ムー、播種13.4万ムー、収穫11.4万ムーとなり、農作業の機械化の割合は57%以上に達した。伝統的な「二牛擡槓」の耕作モデルは激変し、農業生産レベルは大幅にアップした。

2015年まで、チベットにおける大型及び中型のトラクターの保有量は7万台を目標とし、トラクターと組み合わせてセット使用する農機具は19万セット、主要な農作物に関する機械化作業のレベルも61%に達する見込みだ。換言すれば、チベットで農業機械化が高速的に発展すること、機械化された農具の使用率を絶え間なく上昇させることは、チベットの農業の生産様式を人畜力から機械化への変容をもたらすということになる。これは従来のチベットの農業の歴史をぬりかえることを意味し、チベットの農業が高度な機械化へと向かっていることを示している。

これによって、伝統的な生産用具は生産の領域から徐々に消え去り、近代化された農業機械が主役を演じることになると考えられる。近代化された機具が、生産力を高め、伝統的な農耕文化を近代的な農業文化へと全面的に「転換」させ、ひいては飛躍させることになるだろう。

農業機械化の推進と伝統的な生産用具の危機

チベットの農業機械化は、継続的かつ全面的に推進されてきたため、伝統的な生産用具の機能と役割の変化は避けられない。全体的に言えば、伝統的な生産用具の数量と種類は日ごとに減りつつあり、一部の工具はその姿を消すという事態に直面している。そして、やがてはすべての工具が消えてしまうことになるであろう。

しかし、チベットでは自然環境、地形、地勢の違いによって、各地の経済発展がアンバランスであり、農業機械化の程度については地区ごとに相違が存在する。そのために伝統的な生産用具のいくつかは存在し続けることになった。

次に山南地区扎朗県の朗栓林村とシガツェ地区拉孜県の柳の郷柳村で調査した事例を示す。伝統的な生産用具の現状、その伝承、変遷、使用状態などに初歩的な考察と分析を加え、伝統的な生産用具の存在の危機、及びその歴史、文化、更には政治的価値を明瞭にするとともに、非物質文化遺産として重視、保護、利用されることの必要性を示す。

(1) 朗栓峰村

朗栓峰村は扎囊県の扎其郷の1つの行政村である。2011年10月まで、全村の総括的な戸数は161戸、総人口779人である。そのうち、男性は310人で総人口の39.8%を占め、女性は469人で総人口の60.2%を占める。その中で労働力は359人で総人口の46.1%を占める。基本的な農作業は以下の通りである。

2010年に、干害によってハダカムギが大減産したので、2011年から小麦を取り入れることになった。小麦を刈取るには機械を用いる。男性は刈取機を運転して刈り取り、女性は機械が切り残した半端な小さなところを刈取る。刈取作業は4～5日で完了する。そのあと、輸送、乾燥、圧場（石礫で穀類を砕く）、脱穀、貯蔵という流れになる。これらの作業は1ヶ月以内にすべて終わる。刈取り後は、畑に犁を入れる。10月に田畑へ天然肥料を運び、肥料を与えた後に水を一回与える。12月に熊手や機械の熊手を用いて畑をならす。

1月にハダカムギの畑を耕し、機械を用いた種蒔きが始まる。男女とも働いて、男性が機械を運転し、1人の女性が種をまき、後に8～9人の男女が多歯熊手で種を覆う。そして労働の間は共に歌を歌って気持ちを盛り上げる。1日4～5ムーの種をまくことができ、15日間で種蒔きの作業が終わる。

2月中旬にはアブラナの播種とジャガイモの種イモを植える。男性がトラクターを運転してあぜを耕し始め、2人がアブラナの種を蒔き、そのほかは多歯熊手でならして覆う。やはり労働しながら皆で歌を歌って気持ちを盛り上げる。1日に4～5ムーの面積に植えることができる。15日間でアブラナの種蒔き、ジャガイモの種イモ植えの作業が終わる。

4月は除草の季節である。多くの場合、田畑の管理は女性たちの担当であり、小型鋤で草を抜く。5月から8月までの主な作業は田畑の管理、除草、給水（水掛）である。水掛は3～4回行う。水を掛ける時には、順番に一家ごとに一人ずつ出て管理を担当する。畑1ムーの灌漑に一日かかり、すべてが完了するのにはほぼ4～5日かかる。7月から8月に小麦、アブラナとジドの下敷きを作る。以前は作業費15元だったが、今は50元になった。完成までに一日を要する。鍛冶屋はもはや存在しない。水磨坊（水磨き所・製粉所）は1基あるが、個人の所有に属し、自宅用あるいは村民の食糧の加工に用いられている。加工費は1袋8元である。

農業生産活動の規則と特徴が、生産用具の構造と種類、さらには使用状況を決定していることは間違いない。次に家々を例として、さらに具体的な事例を示す。

事例 1

格桑 (ge sang)、女性、小学校卒業、1989 年生れ、既婚、子供 3 人。夫はラサ市の建築現場でアルバイトをしている。所有している農地は 4 ムー足らずなので、農閑期には夫と一緒にアルバイトをすることができる。月収約 1000 元（日本円で約 1.5 万円）である。2011 年のアルバイト収入は約 3000 元（約 4.5 万円）であり、他の収入はない。トラクターは所有していないが、国からの補助金を利用して、必要な時、半額で他の家のものを借りる。耕作には 1 回 20 元（2600 円）、小麦運搬には 1 回 20 元（約 2600 円）かかる。

この家では、鉄鍬（シャベル）、2 個、鎌 2 個、鋤 1 個、多歯耙 2 個、切割刃 8 個、竹ほうき 1 個、円扁 1 個、籠 1 個を所有している。鉄鍬は 10 元（1300 円）である。鉄鍬の柄は 125cm、柄の先端に取り付けられたスプーン状の幅広の刃の幅は 23 cm、長さは 24 cm、鉄鍬の柄をつける穴の高い部分は 3 cm である。鎌は 15 元、鋤は 10 元、多歯耙は 20 元である。多歯耙の柄の高さ約 170cm、切断面 6cm × 4cm、桁の長さ 32cm、切割刃が 8 個付きその長さは 16 cm である。竹ほうきは 10 元、円扁は 5 元、籠は 20 元である。籠は柳の枝で編まれていて、底部の形状は狭く、底部 20 cm²、口部分 45 cm²、高さ 37 cm、四角の一边が約 9 cm である。

自分の所有している土地と親戚から借りているわずかな土地に、ジャガイモ、小麦、油菜を栽培している。村の委員会が畑の耕耘から種播き、灌漑、施肥など、統一的に手配、指導などを行なってくれる。刈り取り時期は作物の成熟度によって自分で決める。労働について厳格な男女の役割分担はない。除草の季節になると、抜いた草は乾かして牛や羊などの家畜のえさになる。農作物を刈り取る時、雑草を抜きとる時、春の耕作をする時などの労働に際して、あるいは豊作を祝う時などに歌う歌がある。例えば「お母さんの羊の毛皮の裏地をつけた服」、「祝杯の歌」、「つるつるの女の子は花」、「納木錯の女神」、「瓦ガル尼」、「空際」など、伝統的な歌もあれば、流行歌もある。（2012 年 7 月 2 日 袋色林村 2 組 格桑）

事例 2

益西卓嘎 (yi xi zhuo ga)、女性、1958 年生まれ、小学校卒業。夫婦と長男、次男、長女の 5 人家族である。15.1 ムーの農地を請け負っている。小麦、アブラナ、じゃがいも、ウマゴヤシの草（2 ムー）などが栽培される。牛 2 頭、豚 1 頭、綿羊 5 頭を飼っている。2011 年の主な収入はアルバイト収入 4625 元（約 8 万円）、農業収入 375 元（約 6000 円）である。柱子と俗称される鋤 2 個、背負い籠 3 個、熊手 6 個、交叉（フォーク）2 把、鎌 4 把、箒 1 把を所有する。鋤は木製の柄を有し、長さ 90 cm、刃の長さ 44 cm であり、機械で作られたものである。交叉は木製の柄を有し、長さ 150 cm、頭の幅 31 cm、断面 4 cm × 6 cm、歯の長さは 19 cm である。

鎌も木製の柄を有し、長さ 40 cm、歯の長さ 23 cm、刃幅は約 5 cm である。箒の柄は木製で長さ 55 cm、頭の幅 25 cm、高さ 15 cm である。現地の野生の丈の高い植物（箒草と俗称される）を素材として作られたものである。（2012 年 7 月 2 日 2 組 益西卓嘎）

事例 3

羅布 (LUO BU)、男性、1962 年生まれ、字は読めるが学校に行ったことがない。簡単な大

工仕事ができる。家族は7人で、実母、妻、言語障害者である弟、3人の子供からなる。所有する農具はほとんど自分で作ったものである。60年代に生まれた人々は伝統的な農具製作を継承しているので、その技術を次の世代につなぐ役割があるといえる。

農機具としては、手で支えるトラクターとハンドトラクターを1台ずつ持っている。それぞれ2003年と2001年に、9000元（約10万円）と24000元（約31万円）で購入した。機械用の犁1部がある。鉄製の刃部分は1年に1回取り替えることになっている。4年間は使用できるといわれる鉄シャベル（12元）を7個もっている。2年は使用できるといわれる鎌（7元）を8個所有している。ただし、伝統的な方法で作るものなら10年間使用できるという（村に鍛冶屋が一人いるが、高齢のため休業状態である）。3年間使用できるという鋤（121元）が3個ある。竹箒（10元）は5個あり、ほとんど自分で作ったものである。野生の箒草と俗称される植物を素材として作られたものである。背負いかご（45元）を4個もっている。背負いかごは購入したものであり、3～4年間は使用できるという。多歯耙を8個持っているが、自家製である。歯は一年に一回取り替えるが、1日に3～4個作ることができるという。柄の長さは160cm、頭は33cm、刃の長さ16cmである。角フォークを4個持っている。自分で作ったもので1年に1回取り替える。多歯耙と角フォークは木製で、柄の部分は柳の木で作られている。頭あるいは柄の部分は胡桃の木で作られる。歯の部分は地元産の次巴木という灌木で作ったものである。この木は強靱で摩耗しにくい。蔵語で永扣（yong kou）という紡錘は10年前に父親が胡桃の木で作ったものである。二つの部分で構成され、上部が尖形で高さ20cm、底部が方形で5cm、厚さ3cm、重さ約250グラムである。何十年も使用できるといわれる。

糸車は蔵語で松扣（song kou）という。木製で30年を経たものである。織機は蔵語で塔尺（tach）といい、どの家でも所有している。

自家製青稞酒を入れる陶製容器（20元）を所有している。青稞酒は次の要領で作る。その年に獲れた青稞をきれいに洗ってから鉄鍋に入れ、水を加えて1時間煮る。焦げないように煮ながら水を加える。その後大籠に置いて、酵母を加え、冷めてから大きな陶製容器に入れる。水を入れて蓋で密封すると1時間後には飲むことができる。飲んだ後、1回目よりやや多く水を加えて同じ過程を繰り返すと再び飲むことができる。3回目も水を多く加えて同じようにして飲むことができる。その後は牛の餌にする。一つの陶罐にいれたままの酒は長い間飲むことができる。（2012年7月2日2組 羅布）

事例4

巴桑（ba sang）、女性、1964年生まれ、小学校卒業。家族は7人で、長女、次女、次女の婿（隣の村出身）、孫娘、孫息子からなる。夫は5年前に他界した。畑は23ムーの畑を所有し、小麦、アブラナ、ジャガイモを栽培している。乳牛2頭、豚2頭（うち1頭は4か月である）、山羊4頭、綿羊23頭、鶏14羽を飼っている。秋になると次女の婿がラサ市の煉瓦工場で数ヶ月間働く。2011年の農業以外の収入は8000元であった。

以下、農作業について記す。たいていは自家のトラクターで耕地するが、村の人同士で手伝い

合う場合もある。播種も家族で行うが、種蒔機を持たない家は借りる。種蒔機のガソリン代を出さない場合は、貸してくれた家の手伝いをすることになる。

背負いかごは柳で編んだもので購入したものである。川の向こうの桑耶乡的松卡林村に藏族の職人がいる。不定期に川の向こうから船でやって来て、物を売りにくる。

シャベルなどの鉄製の用具は30キロ以上離れた山南沢当鎮の漢族の経営する金物屋から買うことになる。そこまではバスで行く。

織機は同じ村の大工が作ったものである。完成まで1カ月ぐらいかかる。既に10年間使っている。高さ約140cm、幅約150cmである。

吾而朵は石を投げる用具であり、婿が1日かけて作ってくれたものである。古い哈达とウールで編んだものである。

鉄炉は10年前に村の鍛冶屋が2ヶ月かけて作ってくれたものである。制作費は1000元かかった(約1.3万円)。(2012年7月3日午前 巴桑)

事例5

卓玛(zhuo ma)、女性、55歳、農業従事者である。字が読めない。家族は8人である。息子3人、娘1人であり、長男は他家の婿になり、次男が農業を継ぐ。三男は先天性の言語障害者である。孫2名と妹(未婚)がいる。娘は33歳、貧血症の治療のために90日間入院したことがあり、この治療費に5万元かかった。このお金は卓玛のご主人の事故の賠償金でまかなったという。請負土地が19ムー(そのうち林地が1ムーぐらいある)あり、小麦、アブラナとジャガイモを栽培している。乳牛を2頭、豚を2頭、綿羊を8頭飼育している。

トラクターが1台あり、2009年の購入時には13万元(約20万円)であった。脱穀機が1台あり、2011年の購入時には1900元(約3万円)であった。オートバイが1台あり、2012年の購入時には6500元(約9万円)であった。鉄製シャベルが4個、背負いかごは3個ある。

草刈り専用の鋤が2個あり、蔵語で久馬(jiu ma)という。柄の長さ13cm、柄の周囲10cm、全長18cm、幅3cm、厚さ0.6cm、月形である。10年前、郷の鍛冶屋に作ってもらった。加工費は5元であった。

鎌は10個あり、10年前に買った際、1つにつき25元であった。伝統的な方法で作られたものである。新型鎌なら1つ15元である(後の調査によると、扎囊县扎塘镇にある四川人が経営している店では1つ6元、十字は1つ18元であった)。馬鋤は8個あり、2012年に購入したときは1つ33元であった。(2012年7月3日午後 卓玛)

事例6

美多曲珍(meì duo qu zhen)、女性、1953年生まれ。字が読めない。農業に従事している。息子は2人で、長男29歳、次男28歳である。2人とも山南の工場の臨時雇いである。年収約3000元(約3万円)である。23歳の娘が一人いて、大学3年生である。請負土地9.006ムーをもっており、そのうち林地が0.001ムー、苜蓿の芝地が0.003ムーである。小麦、油菜、ジャガイモを栽培している。

農具は、鎌 3 個、鋏 4 個と 2 個、十字 2 個と 4 個（その中で機械で作ったものは 1 個であり、卵、野菜などの食材を運ぶ。草、若い家畜などは運ばない）である。

機械は 2011 年澤当で購入したものであり、1 つ 30 元であった。ナイロンで編んである。十部口幅 30cm、長さ 38cm、高さ 30cm、鉄支架高さ約 9cm、長さ約 22cm。底部幅 19cm、長さ 28cm である。伝統的方法で作られた鎌は 2008 年に山南で購入した。1 つ 50 元であった。長さ 12cm、刀の高さ 24cm である。筒は素材が松の木で、高さ 85cm、径 22cm、長さ 145cm、石で作られた蓋が直径 28cm、厚さ約 1cm である。ツァンパ桶は 30 年前のもので木製である。

織機は 30 年前のもので、氍毹（蔵服などにするチベット産の毛織物）を織る。

播種機は蔵語で普祖（pu zu）といい、木製で丁字形、20 年前の自家製である。柄の長さ 12cm、径 3cm、周長 11cm、高さ 33cm、幅 3.5cm である。人参の種播き、および小麦、油菜の補植に用いる。（2012 年 7 月 3 日 美多曲珍卓玛）

事例 7

巴桑、1963 年生まれ、女性。農業に従事しており、小学校卒業。腰の病気があるので重労働はできない。27 歳の息子と 2 人家族で、息子はラサ市の煉瓦工場で仕事をしている。親方で従業員が 8 人、2011 年の年収は 3 万元（約 30 万円）であった。他の収入はない。11 年に、ハドルトラクター 1 台（約 17 万円）、バイク 1 台（4200 元）を購入した。請負土地 1.007 ムーで小麦、油菜、ジャガイモを栽培している。乳牛 2 頭、黄牛 1 頭、豚 1 頭、綿羊 16 頭を所有している。

農具としては、鉄シャベル 4 個、鋤 2 個、多歯釘耙 7 個、背負いかご 2 個、箒 1 個、鎌 6 個を所有している。また、ツァンパ用の桶、碌礮（ろくどく）、石碓、石研磨器、電気酥油桶（電気バター用桶）をそれぞれ 1 つずつ所有している。ツァンパ用の桶は木製で、高さ 22cm、径 30cm、蓋の高さ約 5cm、直径 31cm である。碌礮は蔵語で聶都（nie du）と呼ばれ、石製で、長さ 80cm、直径 35cm である。しかし、現在ではほとんど使用されない。蔵語で阿嘎（a ge）と呼ばれる石碓は打麦場用であり直径 15cm である。竿はビニールパイプで長さ 150cm である。蔵語で古丁（guding）という石研磨器は石で作られたものである。電気酥油桶（電気バター用桶）は山南電気屋で 500 元で購入したものである。（2012 年 7 月 4 日 2 組 巴桑）

事例 8

扎桑、女性、小学校卒業、1973 年生まれ。家族は 3 人で離婚経験あり。長男は 10 歳で小学校 3 年生、長女は 15 歳であり 9 月に高校に進学する予定である。現在、山南でアルバイトをしている。この家の農具は全部購入したものであり、鉄シャベル 1 個、鎌 2 個、鋤（十字）1 個、多歯耙 1 個である。（2012 年 7 月 5 日 2 組 扎桑）

事例 9

嘎玛、男性、1958 年生まれ、簡単な作業を行う大工である。连枷、多歯耙を作ることができる。连枷、推耙、鉄耙、梳粒机を所有する。

连枷は蔵語で加久（jia jiu）という。脱穀用具である。10 年前に自分で作ったものがある。当時、一日に 6 個ほど作ることができたということである。1999 年以降、使用する人がいなくなった

ので作らなくなった。柳の木で作られていて、女性用は軽くて、男性用は重い。小麦、青稞などを打つために使う用具である。

推鈿は自分で柳の木を使って作ったという。製作に1時間かかる。竿の長さ1.55 m、鈿の頭が長方形、長さ55cm、幅11cm、厚さ2.5cmである。収穫した小麦、青稞（ハダカムギ）などを広げるために使われる用具である。

織機は自分で作ったものである。製作に2日間かかる。

鉄鈿は2007年に購入したものである。雨の日には鉄鈿を使い、晴れた日には木鈿を使う。

梳粒機は蔵語で加索（jia suo）という。底は木製で長方形である。長さ1.5 m、面積14cm、歯は鉄製で高さ40cm、幅85cmである。この用具は1980年代から使用され、2008年に廃棄された。当時は胡桃の木を用い、全部の加工費に500元かかった。（2012年7月4日 嘎玛）

事例10

索朗如错、男性、66歳。柳で製作されたあるいは10年間使用したものである。直径45cm、高さ8cm、丸形であり、小麦に混入している石を分離するための用具である。現在、村に専門店があり、同様のものが売られている。（2012年7月5日 索朗如错）

裁縫とは高技術を要する手芸技術といえる。しかしここ数年、新型の裁縫技術を導入した大規模経営によって伝統の裁縫業は厳しい生存の危機に直面している。熟練した裁縫職人のほとんどはすでにこの職業から離れ、伝統の技術ももはや育てられないという状況である。

上述の朗栓林村の事例から山南地区の農業機械について考えるに、農業機械化が進むに従って、農業機械化の割合はますます高まり、それに伴って伝統的な農作業は農業機械に席を譲ることになると考えられる。トラクターの占める割合は年々高まっており、運送、耕起、種まき、刈り取りなどの作業は機械化される。伝統的な農業機械は今なお一定の範囲内で大量に使われているが、昔に比べると主要な生産用具というより補助用具になったといえる。例えば石製ローラー→梳粒機→電動脱粒機、点種器→播種機、手作りの柳製カゴ→機械作りのナイロン製カゴ、木製バター桶→電動バター桶、バターの製作用陶器→電動バター壺などの移行をみると、その変遷は一目瞭然である。

(2) 朗栓峰村

朗栓峰村は扎囊県の扎其郷の1行政村である。2012年6月、全村の総括的な戸数は2971戸、総人口1453人である。農業が中心であり、ハダカムギとアブラナなどを栽培している。山岳地帯であり、狭い耕地が分散している地区である。混播が多くを占めている。ハダカムギとアブラナ、あるいはハダカムギ、アブラナ、エンドウの3種の混播である。ハダカムギとアブラナを混播することで抗倒の能力が強くなる。しかし生産量が低いという欠点があるので、政府は単播を提唱したが、農民は混播に慣れているようだ。全村は基本的に牛耕であり、播種にも牛を用いるが、刈取りは手刈りである。以前は3寸木製チベット式の犁を牛に用いていた。現在も主に5寸

の鉄犁で、依然として牛耕を行い、2牛擡槓の耕作法を続けている。

2牛擡槓はチベット族における伝統的な犁耕技術である。耘即ち木を2頭の牛の肩に置き犁柱につなぐ構造となっている。耕起に際しては、1人が犁柄を支えて、もう一人が牛をひいて耕地を耕す。耕起した後に木槌を用いて手で碎土の作業を行ったり、牛、馬などに木製熊手をひかせて碎土の作業を行ったりする。農業機械の普及に従って、2牛擡槓という犁耕方式の使用はますます少なくなっているようである。しかし、チベットの多くの地方、特に山岳地帯あるいは狭い耕地が分散している地区では、2牛擡槓という犁耕方式は軽便で使いやすくコストも低く、とても合理的である。本村においてトラクターの普及程度はわりに高く、80%以上に達している。貧しい農民以外、ほとんどの家がトラクターを所有している。灌漑の際、多くの溝に水と江水をひいて注ぐ。1年の農作業のおおよその手順は以下のとおりである。

秋の収穫は9月から始まり、小麦、ハダカムギ、アブラナの刈取りに約10日間かかる。刈取りながら「労働の歌」を歌うのが昔からの風習である。食事は1日に3度で、朝・昼・晩である。

収穫物は、ロバ、トラクターなどに積んで運び、脱穀しながら歌を歌う。脱穀は牛と馬が踏みつけて行う。しかし、2006年にはハンドトラクターの4ラウンドで押さえるようになった。脱穀の際、ハダカムギ、アブラナが混じってしまうが、脱穀機でこれらを分けることは難しく、人の手で分ける方法がとられる。篩で分けたり、空中に撒いて分けるなどの方法である。

施肥は冬季にロバ、トラクターおよび馬車、人力車などで肥料を運んで施肥を行う。農閑期は1月であり、旧正月の前後には畑の仕事を行わない。耕地の整備は2月に池を修理して、水利の準備をする。3月に田畑を耕す。これは男性だけが行い、女性は鋤刃の上に残った雑草などを始末する。4月になると、渠水、池の水を灌漑地に放つ。これは、女性の仕事である。土地の質により良・中・差という3段階があるため、先に水を良地に流し込んで、次に中等の地に、最後に差等の地に流す。年間に生産量の高い土地を良い地とする。灌漑は主に女性の仕事である。面積が大きすぎる場合に男性も手伝う。誰かの家の地に水を流す際、各家庭の女性が1人出るようになる。

土地の質によって、生産量が少なく、増産も少ない場合には休耕させる。ただし、休耕する面積は多くない。

5月に種蒔きが行われる。小麦は単一蒔き、ハダカムギとアブラナは混ぜて蒔く。男は牛犁で耕し、女性は種を蒔き、働きながら歌を歌う。ある県の規定では5月28日前に春の種蒔作業を終わらせる事になっている。もちろんそれぞれの村の具体的な状況によって日にちは異なる。

上述のように、拉孜県の農業機械化の割合は扎朗県に比べて低いために、伝統的な耕作方法が今でもみられる。例えば牛耕、牛播、手による刈取りなどである。基本的に多くの伝統的な生産用具がそのまま残されている。例えばカゴ類、熊手類、犁、シャベルなどである。興味深いのは、古い水車と手動式の臼が電動の製粉機と共存していて、依然として余熱を発していることである。

伝統の紡織機械は家庭に不可欠な工具である。しかし現在は鍛冶屋、大工、石工などの職人の数は以前よりかなり少なくなっている。機械化の普及に従って、伝統的な生産用具を使う機会はさらに少なくなってきた。一部の農具はだんだん淘汰されていく。これが現実であり、時代の流れである。

伝統的な生産用具の歴史的・文化的価値とその保護

チベットの伝統的な生産用具は、その機能と用途によっておよそ以下のように7種類に分けられる。

- 1、耕地用工具、即ち畑を耕す工具、畑を掘削する工具、畑を整理する工具である。例えば二牛式犁、木製箒などである。
- 2、播種用工具 即ち種を播くための工具である。例えば草カゴなどである
- 3、除草用工具 即ち除草作業用の工具、間引き作業用の工具、根元に盛り土をする作業用の工具である。例えばハンド鋤。
- 4、灌漑用工具 例えば水車、シャベルなどである。
- 5、収穫用工具 刈取り、脱穀、精選の用具を含む。例えば鎌、石製ローラー、箕、梳粒機（穀類を整える機械）、ふるいなどである。
- 6、加工用工具 主に食糧の加工用の工具である。例えば水車、手碾き臼などである。および羊毛の加工用工具がある。例えば糸撚り車、織機などである。
- 7、輸送用工具 草カゴ、ロバなどの畜力がある。それ以外に、バター製作や醸酒に用いるバター桶、陶罐、金属などの工具がある。

結論的にこれらの伝統的な生産用具は、チベットの歴史と文化を伝え、チベット民族の記憶と感情を凝結していると言える。社会の発展と変遷を反映するものであり、科学技術の進歩と飛躍を実証し、民間性、大衆性、広範性、時代性などの特徴を最も鮮明に有する。真の「根の文化」に属するものなのである。それゆえ、伝統的な生産用具の歴史と文化の価値を再認識し、非物質文化遺産という一面を加えて、保護、研究と利用を行うことが新しい時代の課題になるのである。

まず、国外の先進的な経験を参考にし、伝統的な生産用具を学術研究の範疇に組み入れて、学術研究の視点から、地区あるいは経済タイプにわけて、計画を立て、全面的な調査をする。その上で、チベットの伝統的な生産用具に関する資料を編纂することを考えるべきである。動的あるいは静的な展示を行うことによって、チベットの伝統的な農業用具、手作業の用具の歴史的変遷、及びその機能、特徴、文化の価値を紹介するのである。

急激に科学技術の発展する時代、伝統的な生産用具及びその生産技術は、日に日に姿を消し、歴史の舞台から消える運命にさらされている。しかし、人類社会の進歩と発展過程で生産力の重要な要素として伝統的な生産用具を非物質文化遺産として保護することは、世界各国、特に先進国

の一つの重要な使命になるだろう。近隣においては、日本が最も早くこの方面の研究を展開し、保護に努めている国家である。この方面の豊富な実践経験を蓄積して、一種の専門的学問分野を形成したのが民具学である。日本民俗学に基づくと、いわゆる民具は日常生産・生活における諸要求に基づいて作られ、長い間使用されてきた道具あるいは器具の総称である。これらの実物は、民衆の日常の生産生活の変遷と社会下部の文化の構造と性質に関する重要な資料である。民具を研究することは、民俗性、大衆性、地域性、民族性、時代性などの特徴を鮮明に知ることになる。民具は学术界から受け入れられ、その概念は広く認知されるべき学術的資料なのである。民具はその機能と使用範囲から、大きく以下のように分類される。

- 1、衣食住に関するもの：家具、灯火用具、調理用具、飲食用具、衣服、履物、装身具、出産・育児用具、保健用具
- 2、生業に関するもの：農具、山樵用具、狩猟用具、漁撈用具、紡織、染色に関するもの、畜産用具、交易用具
- 3、通信・運搬に関するもの：運搬具、旅行具、報知具
- 4、団体生活にかかわるもの：若者宿の道具や地割道具 儀礼に関するもの 誕生より成年式までのもの、婚姻関係のもの、厄よけに関するもの、年祝いに関するもの、葬式や年忌に関するもの、信仰・行事に関するもの偶像、幣束類、祭具及び供物、楽器、仮面、呪具、祈願具 娯楽・遊戯に関するもの玩具・縁起物。

民具は一定の時期の歴史と文化を積載、伝承しており、それ自身も、さまざまな変遷を経験しているが、歴史の流れの中に暮らす多くの人々は近代的な生活様式の変化に従って、大量の道具を必要としているが、民具には目を向けなくなっている。それゆえ、民具の調査、収集、整理、研究を行うことは緊迫した課題となる。また、社会の発展に従って、民具にも、ある範囲での変化が発生する。たとえば民具の定義に従うと、現在の生産生活用具は潜在民具、基本民具、在来民具、新民具、自給民具、流通民具等の範疇に入れられる。民具が活用されていけば、民具の内容も時代とともに豊かになり、民具の文化も続いていく。民具の変化によって研究方法もそのつと調整されるべきで、今後の検討に値する新しい課題となる。

民具の収集と展示は非物質文化遺産保護として重要なものであり、同様に各界から重視されるべきものである。日本には、国家レベルから地方レベルまで、また、学术界から民間まで、国立から私立まで、多くのルートをもって多方面にわたって、それぞれの特色を生かしながら、非物質文化遺産を保護、収集、研究、展示を行うシステムがある。例えば、神奈川大学日本常民文化研究所、千葉県の国立歴史民俗博物館と大阪府の国立民族学博物館、各地の市区町村の民俗資料館、歴史民俗資料館、郷土資料館など機関の数も多く、私営の展示館も少なくない。さらに、民家、武家屋敷などのなかに展示室を設けているところも多い。

他山の石は玉を研究することができる。国外の先進的な経験を参考に、伝統的な生産用具の全

面的調査、収集、保護と研究をスタートさせるべきである。これは現実的な意義と同時に深遠な歴史的意義を持つことである。

次に、充実させるべきことは非物質文化遺産の内包である。伝統的な生産用具は非物質文化遺産の範疇に組み入れるべきである。中国は多民族国家であり、古代文明と悠久の歴史がきわめて豊富な文化遺産を残した。中国は文化遺産の保護を非常に重視し、2011年6月1日に《中華人民共和国非物質文化遺産法》を施行した。しかし経済のグローバル化と社会の進展に従って、中国の文化遺産の生存環境は次第に悪化に向かい、保護の現状が懸念され研究の停滞も深刻である。同時に、時代に応じた内包の境界を明確にすることも必要である。国情、区の場合が異なることによって、その地、その時代に適した方法がとられてきた。それを調整し、充実させることが重要である。非物質文化遺産の境界を区切ることに関しては、比較的権威ある記述によると次のようになる。“非物質の文化の遺産”は、各群体、団体、時には個人としてその文化遺産の各種の実践、発現様式、技能の知識及びそれと関係がある工具、実物、工芸品と地域である。そして、“非物質文化遺産”は次のように分類される。

- (a) 口承による伝説と表現、非物質文化遺産のマスコミの言語を含む
- (b) 芸能
- (c) 社会の風習、儀礼、祝祭日
- (d) 自然界すべてに関する知識と実践
- (e) 伝統手工芸技術。中国において最初に登録された国家レベルの非物質文化遺産の項目は民間文学、民間音楽、民間舞踊、伝統芝居、演芸、雑技と競技、民間美術、伝統手芸技術、伝統医薬、民俗類など10種類である。これによると、伝統的な生産用具は「伝統手芸技術」に属するべきである。

非物質文化遺産の保護の実践過程で、伝統的な生産用具を全体的に組み入れることは難しい。代表的な少数のもの、技術性の高いもの、ある一定の影響を持つもの、ある程度の知名度のあるものが組み入れられるだろう。極言すれば、普通の伝統的な生産用具こそが生産力発展のレベルを代表していて、豊富な歴史文化の担い手といえる。これを非物質文化遺産に組み入れることが重要である。

例えばチベットは2007年から非物質文化遺産の全面調査を正式にスタートさせ、その中の22の項目が国家級非物質文化遺産に入れられた。その中の民族手芸技術の種類には、山南地区とシガツェ地区のチベット民族邦典、タンガ織り技術、チベット族の製紙技術などがある。拉孜県については、農村歌舞「拉孜堆諧」、チベット刀、六弦琴、チベット靴、陶器、伝統チベット医薬など6項目が非物質文化遺産として挙げられた。その中の有名な拉孜刀は民族手芸品であり、また生活用具でもある。

チベット自治区のレベルでも、各市、県のレベルでも、伝統的な生産用具が持っている非物質

文化遺産性に対しては注目を喚起されることはなく、伝統的な生産用具は依然として非物質文化遺産の視野から外されている状態である。生産用具が持っている非物質文化遺産性に対して注目を喚起することは、チベットの特色ある農具博物館あるいは郷土博物館がやるべき急務である。

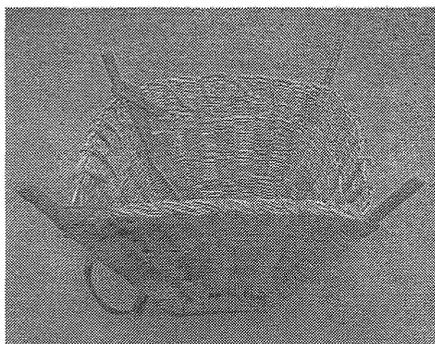
伝統的な生産用具は「民具」として重要な学術的価値があり、民具学の研究範疇に入れるべき非物質文化遺産として非常に際立った文化機能があると考えられる。現在、中国全土には3589館の博物館があり、国有博物館3054館、民間博物館535館であるが、伝統的な生産用具をテーマとする国家レベルの博物館は非常に少ない。これは悠久の農耕文明を持つ農業大国らしからぬことである。一方、民間では伝統的な生産用具を収集し保護することが重視され、私営の農具博物館が絶えず大量に出現している。有名な博物館を例に挙げると、蘇州市角直鎮江南水郷農具博物館、山西省長治市張莊村の農具博物館などである。

チベットにとって、チベット博物館は部類が最も多く最大規模の博物館といえるのだが、現在に至るまでこの博物館は伝統的な生産用具の展示室あるいは展示館を1か所も設けていない。一方、地方の博物館がそれに注目した展示を行っている。たとえば、工布江達県における太昭陳列館は収集した民具を展示している。ある意味では観光事業の一環であり、郷土の教育を目的とするにはまだまだ遠い道のりであるが、1つの始まりであると考えられる。非物質文化遺産を保護するには、専門的な郷土博物館、あるいは現存の博物館が機能を十分に発揮して、伝統的な生産用具を総合的、系統的に収集し、整理、展示、さらには研究、分析を行うことが重要である。今後の1つの重要な課題であろう。

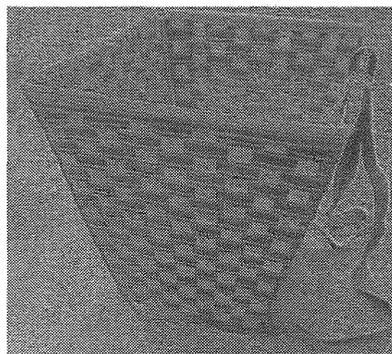
注

¹ チベット社会歴史調査資料叢刊編纂組「チベット族社会歴史調査」二 チベット人民出版
1988 p 214

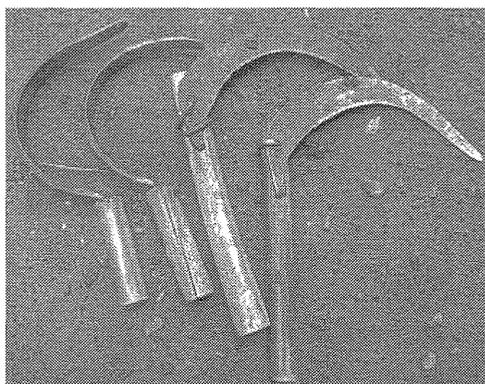
図録



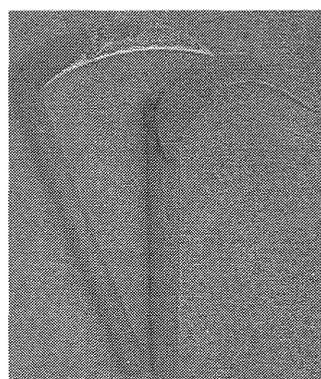
左：柳の枝で編まれた伝統的なカゴ



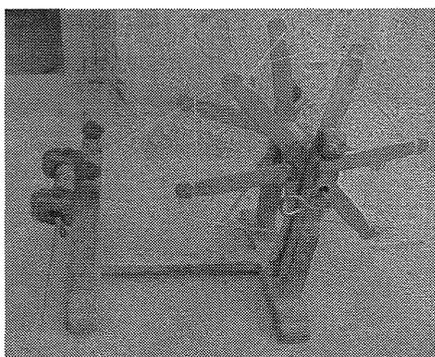
右：新式の機械で作られたカゴ



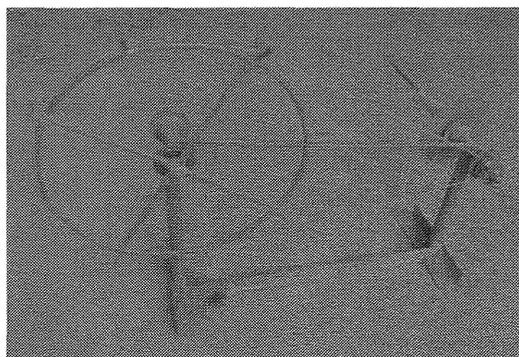
左：手作り鋤と鎌



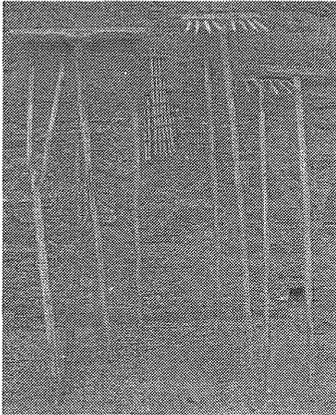
右：機械で作られた鎌



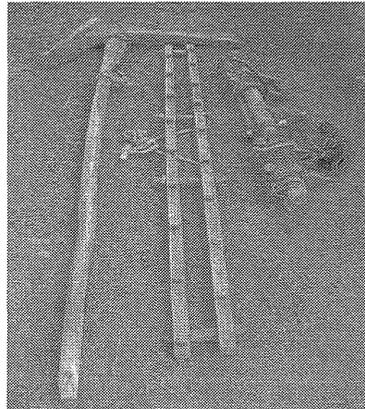
左：伝統的な木製紡車



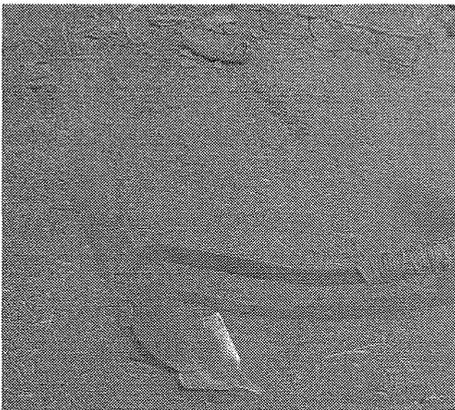
右：鉄製紡車



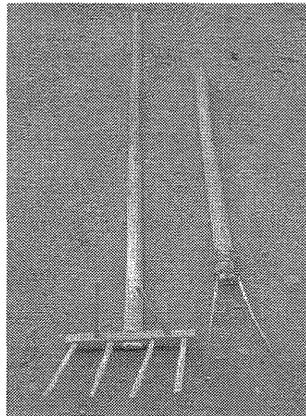
左：双より叉、推耙、連枷、多齒耙、角叉



右：伝統的な手ベツト犁、木耙、牛轆



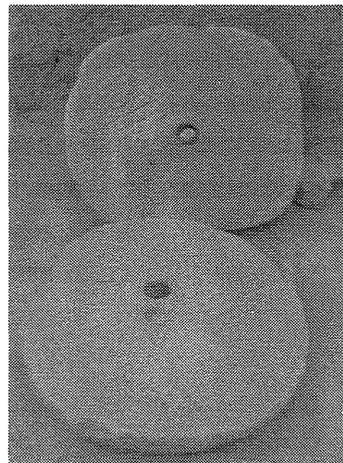
左：新式鉄犁



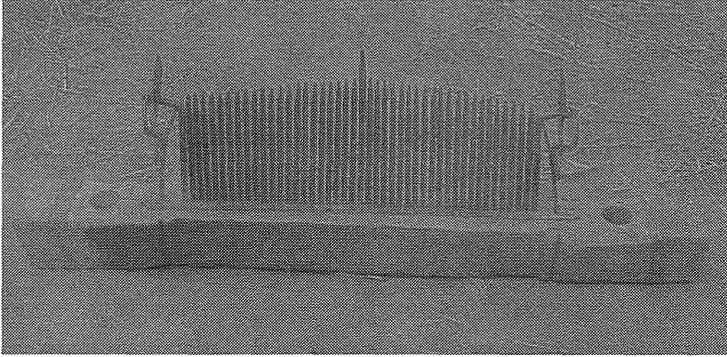
右：角叉と羊角叉



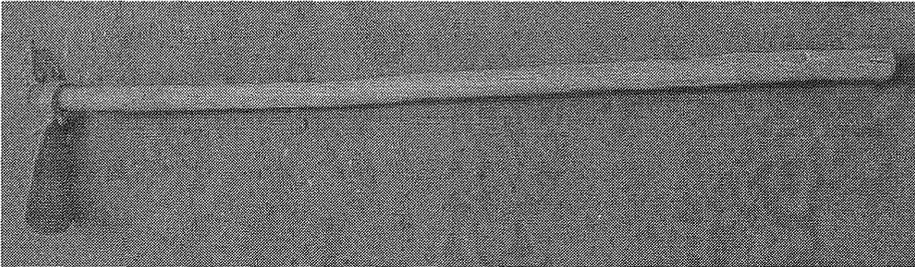
左：石製ローラー



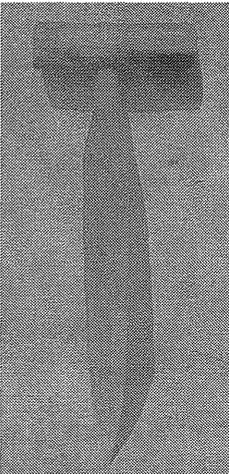
右：手磨き



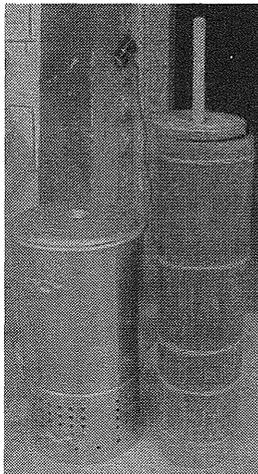
2008年まで使われた梳粒機



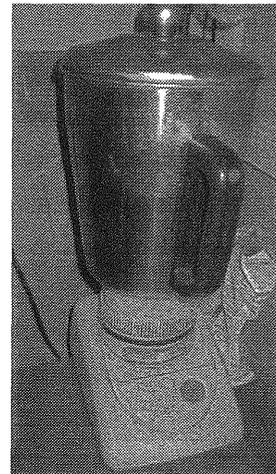
手作りの鉄製鋤



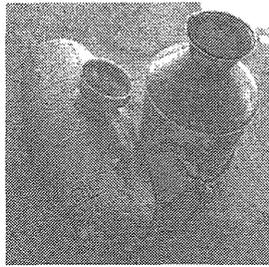
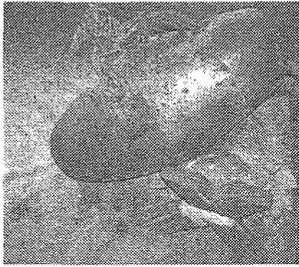
左：点播器



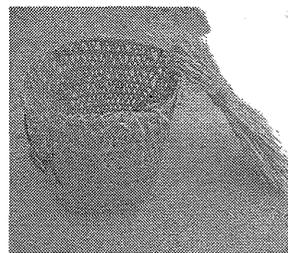
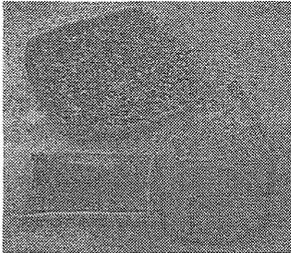
中央：電動バター桶と
伝統的な木製バター桶



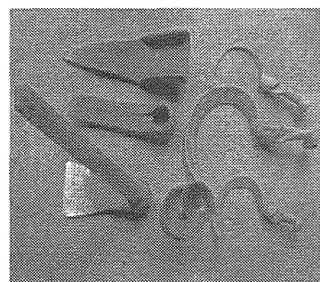
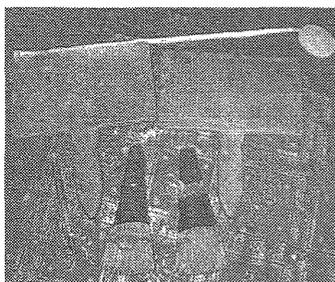
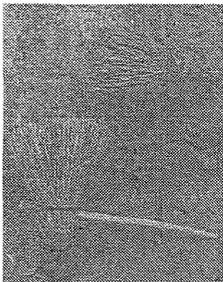
右：電動バター壺



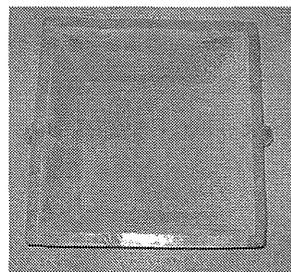
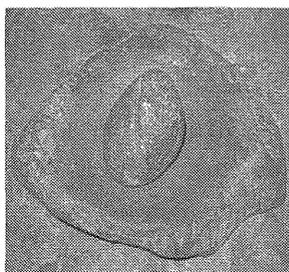
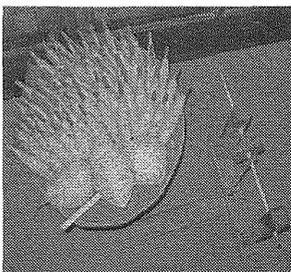
左：陶製バター容器 中央：プラスチック製バター容器と鉄製桶 右：陶製酒を醸造する容器



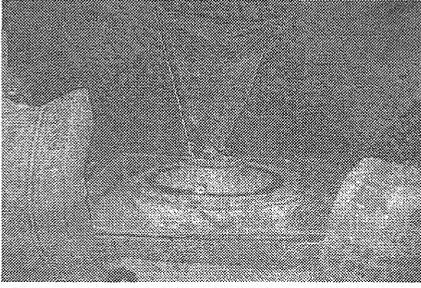
左：ふるい・丸カゴ・背負いカゴ 中央：深い竹カゴ 右：竹カゴとほうき



左：伝統的なほうき 中央：伝統的な梳毛板 竹製の穂穂刷（はけ） 右図：鍛冶職人の作った農具



左：羊毛線シャトルと紡ぎ車 中央：石質研磨器 右：伝統的な計量器（木製容器）



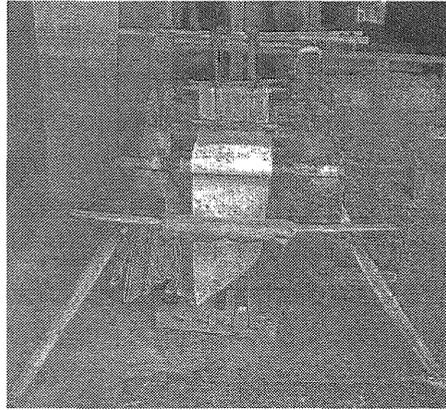
左：水磨



右：畜力で運搬（チベットロバ）



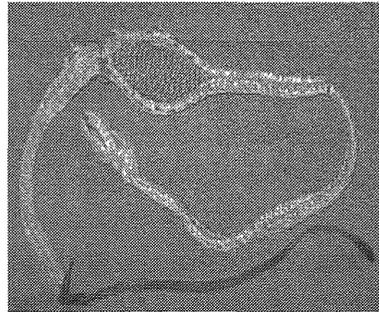
左：紡線錘



右：織機



左：伝統的な衡器（チベット秤）



右：抛石器—吾而朵